

水無月の断面を見よ雨雲を垂直に切る和菓子職人

駒田晶子

白いうるろうの上に小豆を散らして固めた「水無月」という和菓子を作っている現場の歌らしい。「雨雲を垂直に切る和菓子職人」という見事なフレーズを生かすための、第一二句の工夫に感心した。

テナーサククスこの金色の管から絞りだされる神の腑ハツ 松岡秀明

新宿のライブハウス・ピットインにかかわる今月の六首の中の作。テナーサククスの魅力をクローズアップして、「この金色の……」以下、秀逸。前にもジャズをうたったこの作者の作をこの欄にとりあげた気がするが、また選んでしまった。

Tシャツと肌のあいだにすべり込む風のぬるさは夏の始まり 齋賀万智

季節の移行は万葉集時代から、短歌の主要かつ重要な主題の一つだった。この一首、じつにシンプルなかつたで、現代社会の日常そのものの中の夏の始まりがうたわれている。

スマホ繰り百年前を調べればフグ田サザエの生年と知る 加藤由かり

たまたま百年昔を調べたら、サザエさんの生年だった、という。動機や状況を削除して、ストレートに結果にスポットを当てて一首もありだと思ふ。私も調べてみたら、磯野サザエの生年月日は、一九二二年（大正十一）十一月二十二日。私の母より八歳年下だった。

## 短歌の現在

### No.497 今月の15首を読む

#### 佐佐木幸綱

サウスポールの猫の一撃 殺めたる窓の家守は咎など言はぬ 尾上キヌ子

自然界のドラマのありのままをクローズアップしてみせた一首。猫に一撃でやられてしまったヤモリ。ヤモリは一メートルも飛ばされたのだらうか。第四句までは、いい。しかし、結句はやはり言い過ぎだらう。

場所に貼りつく記憶はありてあの椅子で私を待つていてくれた人 細溝洋子

「場所に貼りつく記憶」という言い方に注目する。季節に貼りつく、時代に張りつく記憶等々、私自身の記憶のあれこれをふりかえって、さまざま記憶のありかを点検したりした。

朝焼けを一艘曳きのシラス舟戻りくる見ゆ土手の上より 児島昌恵

シラス漁はふつう網を二艘で曳くのだが、一艘曳きというのがあるらしい。一艘で曳くと一回の収穫量は少ないが、短時間で曳けるために、シラスを傷めることが少ないのだという。「一艘曳き」という語をうまく使って、季節の景色を的確にとらえている。

保存瓶を揺らしなませのぞきこむ梅の仕事はいといそがしき 山中 蕾

上句、動詞を小刻みにならべて、いそがしい感じをうまく出している。「梅の仕事」とは、梅が匂を迎える季節に自家製の梅干しや梅酒などの保存食を作ることだそうだが、一般名詞としてすっかり定着したようだ。梅干し、梅酒、梅シロップ（梅ジュース）、梅ジャム、青梅